

バトルガール ハイスクール PART.1

Believe

原作・監修：コロプラ
著：八奈川景晶



ファンタジア文庫

2598

口絵・本文イラスト ハル犬
キャラクター原案 コロプラ

目次

- 一章 渋谷に行くのは私です！
 - 二章 特訓です！
 - 三章 堅物とオシャレで両手に花
 - 四章 懊める生徒会長の攻略法
 - 五章 少女たちの作戦会議はお泊まり会で
 - 六章 初めての再会
 - 七章 失われた力と新たなる力
 - 八章 誰かのために、みんなのために
 - 九章 エピローグからプロローグへ
- あとがき

BATTLE GIRL HIGH SCHOOL
CHARACTER

中1



藤宮桜

FUJIMIYA SAKURA

中1 らしからぬ大人びた発言をする
将棋大好きおじいちゃんっ子



南ひなた

MINAMI HINATA

大家族に囲まれて育った、
星守クラスの元気印



星月みき

HOSHITSUKI MIKI

誰よりも元気で明るい、
天真爛漫ながんばり屋さん



若葉昴

WAKABA SUBARU

スポーツ万能な
ボーイッシュガール



成海遙香

NARUMI HARUKA

医師を志す、
心優しいしっかりもの

中2



千導院楓

SENDOIN KAEDE

プライドが高そうに見えて、
実は誰よりも努力家な名家のお嬢様



綿木ミシェル

WATAGI MICHELLE

カワイイ物が大好きな、
小動物系甘えん坊



天野望

AMANO NOZOMI

ゆりとは反発ばかりだが、
実は友達想いのファッションリーダー



火向井ゆり

HIMUKAI YURI

規律を重んじる、威厳ある
(つもりの) 王紀委員長



常磐くるみ

TOKIWA KURUMI

植物とお話のできる (?)
マイベースな天然系不思議ちゃん

中3



朝比奈心美

ASAHI NA KOKOMI

少し内気で泣き虫だけど、
心優しい巫女の女の子



蓮見うらら

HASUMI URARA

キュートな笑顔の、
キャビキビ系小悪魔娘



粒咲あんこ

TSUBUZAKI ANKO

人と話すことが苦手な
インドア派ネットオタク



芹沢蓮華

SERIZAWA RENGE

女子の大好きな、セクシーで
色気あるお姉さま



楠明日葉

KUSUNOKI ASUHA

容姿端麗、頭脳明晰の
和風生徒会長

一章 渋谷に行くのは私です！

その時、星月みきの表情に余裕はなかった。

頬をつゝと汗がしたり、顎の先からぼとりと落ちる。

自分の心臓の音がはつきりと、しかしどこか遠くに聞こえる。

そんな鼓動を押さえつけるように、ぎゅっと握った右手を胸に押し当っていた。深く長く呼吸を繰り返す。

はやる気持ちを落ち着けるようにな。

いや——己の闘志を昂ぶらせるためか。

自分が持てるすべてをぶつけるため、少女は次の瞬間に懸けた。

そして告げた。

「…………行くよ！」

握りしめた右手を胸元から引きはがし、渾身の力で後ろに引く。

上半身を右へと限界までひねり、改めてこぶしを握り直す。

そして告げた。

「…………行くよ！」

握りしめた右手を胸元から引きはがし、渾身の力で後ろに引く。

上半身を右へと限界までひねり、改めてこぶしを握り直す。

そして告げた。

「…………行くよ！」

「じゃーんけーんぱんっ!!」

みきが出したのはグー。

その先に見えたのは——チョキ。

「みき、やつたわね！」

「やつ……やつたーつ!!」

それまでの緊張から解き放たれたように、みきが飛び跳ねて喜ぶ。

高々と突き上げた右手は勝利のグーを掲げていた。

「みき、やつたわね！」

「よし！ アタシたちが優勝だー！！」

すぐさま駆け寄ってきたのは成海遙香と若葉昂である。

二人ともうつす涙さえ浮かべ、みきの勝利に歓喜していた。

「それじゃ、次の渋谷奪還授業に行つてもらうのは、みき、昂、遙香で決定ね」

勝負の行方を見守っていた、神樹ヶ峰女学園の先生——八雲樹が決着を告げた。

◆ ◆ ◆

かつて、神秘なる力を宿す神樹と、その加護を受けた少女——星守^{ほしもり}によって地球は守られていた。

だが五年前、謎の侵略者^{なぞのしんりくしゃ}——『イロウス』によつてその平穏^{へいおん}は破壊^{はかい}された。

通常兵器ではイロウスに歯が立たなかつた人類は、生き延びるために地球を飛び出すしかなく、その生活圏^{せいかん}を地球外のコロニーへと移していた。

もう地球の地を踏みしめることは叶^{かな}わない夢なのだろうか——誰もがそんな不安に駆られた時、残された希望が星守だった。

星守たちは今日も戦い続ける。

イロウスから地球を取り戻すために。

みんなと自分たちの未来を取り返すために。

◆ ◆ ◆

「しつかし……じやんけんつて……」

呆れたように呟いたのは御剣風蘭だ。

元星守であり、樹と同じく星守たちの教師を務めている。現在は天才科学者として名を馳^はせる彼女は、じやんけんで決めるというやり方に不満だつた。

「戦闘シミュレーションの成績で決めるとか、なにかなかつたのか?」

【風蘭にしてはまともな意見ね】

「……ほつとけ」

チクリと痛いところを突いてくる樹に風蘭はぱつが悪そうに顔を逸らした。

「今回は星守同士の連携^{れんけい}を高めるための奪還授業でもあるのよ。だから単純な強さで決めちやダメなの。お互^{たが}いに気が知れた星守同士じゃなきやね」

「歳^とが近い仲良し同士で組ませたのは分かる。だがじやんけんつて……」

「仕方ないじやない。成績で決められない以上、一番公平なやり方よ」

「……そですか」

じやんけんなんかで決めていいのか、という疑問はなおも風蘭の胸の内に留まる。

しかし勝負がついた今、星守たちを見渡してみると——みんな意外にも真剣^{しんけん}に挑んでいたようだつた。

「くつ……ワタクシのチヨキが負けるなんて……」
 自分が出したチヨキを凝視しながら千導院楓が悔しそうに呟いた。
 わなわなど震えるその背中に、ポンポンと添えられる手が二本。
 「いやいや楓、チヨキがグーに勝てないのは常識じゃぞ？」
 「そうだよ楓先輩、ハサミじや石は切れないよ？」
 のじや□調でツツコミを入れる藤宮桜と、無邪気に正論をぶつける南ひなただつた。
 「このワタクシが負けてしまうなんて……。千導院家の者として、お父様にどう説明すれば……」

本気で不安そうな楓が自分の手を凝視する。
 歴史ある名家の跡取り娘である楓にとつては、じやんけん一つとつても、負けられない
 真剣勝負なのだつた。

「楓、じやんけんに千導院は関係ないぞ」

「なになに、楓先輩のじやんけんつてひなたのじやんけんと違うの？ どこが違うの!?」
 桜のツツコミもひなたの好奇心も、苦い敗北に沈んだ楓には届いていなかつた。

「こうなつたら、じやんけんの世界に千導院だけの特別ルールを……」

「どんな負けず嫌いじや」

「グーに勝てるチヨキを作っちゃうの？ すゞいっ！」

「……ねえ蓮華」

携帯ゲーム機片手に、粒咲あんこは気だるげに呼びかけた。

「ん？」

ウエーブのかかった髪を指でくるくるしていた芹沢蓮華が応える。

「帰つてこないね、明日葉」

「そうねえ～」

二人が眺める先には、パーを出した体勢で石像のようく硬直している楠明日葉がいた。
 高校三年生組である三人は一回戦でみきに敗れていた。
 意気揚々と代表を買つて出た明日葉は、みきが繰り出した全力全開のチヨキに負けたの
 だつた。

「うくん。すつごくシヨックだったみたいね～。もう、明日葉つてば意外とカワイイんだ
 から♡」

「生徒会長だからって意気込んでたんじゃないの？」

「でも仕方ないわー。じゃんけんは公平だものー」
でもなんか面白いからこのまま見ていよう——言葉にせずとも一人とも思つてること
は同じだった。

「だから、私はグーを出すべきだと言つたんだ！」

火向井ゆりは小さな身体を大きく乗り出して猛然と主張していた。

「だつて多数決でパーになつたんじゃん……ねえ、くるみ？」

「うん……。さつき花壇でお花さんに相談したらパーがいいって教えてくれた」
ちつこいゆりとは対照的に大人びた二人——天野望と常磐くるみが反論する。

パツと見ると妹が姉たちに抗議しているようだが、三人とも同学年である。

「でも……でもパーで負けてしまつたぞ！」

「仕方ないよ、ゆり。多数決は民主主義の基本だもん。ねえ、くるみ？」

「うん……。そうね」

望がそれとなく話を脱線させつつあつた。

これにくるみが無意識に乗つかつてしまふ。

それに気づかないゆりがぐつと隠つた。

「うん……。そうね」

「た、確かに……。民主主義は大切だが……」
風紀委員長である以上、規律を乱すようなことはできない——引き下がるしかないゆり
だつた。

そんな彼女にそつと背を向けた望が、くるみにぐつとサムアップする。
「へへーん、大成功」
まんまと言いくるめられたゆりを横目に望は、話を合わせてくれてありがとうと、くる
みにサインを送る。
「……？」

そんな望に、話を合わせたという自覚もないくるみは首を傾げるのだった。

「もおおおお！ うららが一番になれないなんて、こんなの間違つてるー！」
ツインテールを振り乱して蓮見うららが悶絶していた。
「う、うららちゃん落ち着いてー！」

「むみい……うらせんぱい怖いよう……」
オドオドしながらだめるのは朝比奈心美、怯えたように縮こまつているのは綿木ミシ
エルだ。

一人ともうららの勢いにすっかり呑み込まれている。
「なによ二人とも！ 負けちゃったのに悔しくないの！」

「そ、それは……残念だけど……」

「うららせんぱいが怒つてる……」

「怒つてないわよっ！ 悔しがつってるのっ！」

『ひい〜!!』

うららの迫力に心美とミシェルが抱き合って震えていた。

「で、でもほら！ 可愛さだつたらうららちゃんがナンバーワンだよっ！」

咄嗟に心美がうららのアイドル魂をくすぐる。

「えつ……？」

「ねつ、ねつ！ ミミちゃんもそう思うよね!?」

「う、うん！ うららせんぱい、最高にかわいいよ〜っ！」

二人が涙を浮かべながら必死にヨイショすると、

「当然でしょ！ うららは未来のスーパーアイドルだもん！ 宇宙一カワイイんだから♪」

コロッとした機嫌が直つてしまふのだった。

「真剣に……挑んでたんだよな、きつと……うん」

星守クラスの表情を見渡した風蘭は、いささか自信がない様子で呟いた。

そんな中、騒ぎを鎮めるように樹がパンパンと手をたたいた。

「はい、選ばれた三人はさつそく準備に取りかかって」

『はーい！』

みきと昂、遥香だけが元気よく返事し、残る面々は落ち込んだように『ほーい』と力なく返した。

◆ ◆ ◆

「ここが……渋谷なんだね」

渋谷へと舞い降りたみきは、かつては人々があふれて賑わっていたであろう光景を思い描いて息を呑んだ。

人の手を離れた街は風化が進んでいた。

道路はあちらこちらで隆起、陥没していて、アスファルトの割れ目を雑草が埋めている。居並ぶ建物も傷みが激しく、ひび割れた窓ガラスが砂埃にまみれていた。

驚くほど静かで、なにも動かない。まるで写真を見ているようだ。
文字通りの廃墟——人々に捨てられた街並み。

その冷たい空気につきの喉^{のど}がごくりと鳴つた。

「分かっていたつもりだったけれど、こうして目の当たりにすると……」

「うん……。胸の奥の方がぎゅってなる気がするよ」

昴も遙香も感じところはみきと同じだった。

じやんけんトーナメントを勝ち抜いた嬉しさなんて今は昔、自分たちは星守の代表としてここに立っているのだという覚悟がこみ上げてきた。

自然と表情が引き締まる。

「この場所からイロウスを追い払^{はら}うのが、渋谷奪還授業^{だっかん}……またみんな、ここに戻^{もど}つてられるのかな……」

『感傷に浸^{ひま}っている暇^{ひま}はないわよ』

「八雲先生！」

みきたちの意識を引き戻すように樹からの通信が飛んできた。

「五年前のあの日……イロウスが大量に現れた【審判の日】以来、人類は地球を捨てざるを得なかつた……。だからこそ、この渋谷奪還授業は地球を取り戻す重要な一步よ」

ゆつくりと、言葉ではなく決意を伝えるように樹が告げる。

五年前のあの日——現役の星守だった樹は、地球を奪われた悔しさを誰よりも理解していた。

「それができるのは、神樹の力を受けたあなたたちだけ……星守の活躍^{かつやく}に期待しているわ

自分たちの使命を胸に刻み込むような樹の声に、みきたちはただ、黙つて頷いた。

「行こう、昴ちゃん、遙香ちゃん」

三人の身体が光に包まれる。

やがて姿を現したその身は星衣^{せいい}に包まれていた。

神樹の力を宿し、イロウスが放つ瘴氣^{しょうき}にも耐えうる。

星守にとっての最大の武器であり、最後の鎧^{よろい}だ。

「絶対に……地球を取り戻そうねつ！」

渋谷の街へと向かつたみきたちは、さつそくイロウスの群れに遭遇した。

小型種が十体と少し——なにをするでもなく徘徊^{はいかい}している。

(いよいよだ……)

剣を握るみきの右手が自然とぎゅっと締まつた。

(これまでもイロウスと戦うことはあったた……。でも、奪還授業を任せてもらつたのは初めて……)

「大丈夫よ、みき」

力む彼女の手をほぐすように遥香がそつとななる。

「何度もシミュレーションで訓練してきたんだから、負けるはずがないわ」

「そうそう。アタシたちの見事なコンビネーションでズバッとやつちやおう！」

昂がニカツと笑つてみきの背中をたたく。

二人の優しい声にみきの身体から緊張が抜けた。

「…………うん！ ありがとね昂ちゃん、遥香ちゃん！」

改めて剣を構えたみきに、昂と遥香もそれぞれの武器を手に肩を並べる。

「…………行こうっ！」

みきのかけ声を皮切りに、三人はイロウスの群れへと突っ込んでいった。

『ギッ？ ギギギッ！』

突然の奇襲にイロウスたちの動きが止まる。

その隙を逃さずみきが斬り込んだ。



突っ込んだ勢いそのままに一体を討伐、さらに踏み込んで奥の一体を仕留める。イロウスが混乱から立ち直る前に、返す刀で三体目を追い詰める。

(うん、大丈夫だ)

心臓の鼓動は太鼓を打ち鳴らすように激しく、でも頭は水を打つのように冷静に。

みきは自分がやるべきことを着実に遂行した。

(できる……私にはできる……)

その自信がみきをさらに躍動させた。

飛びかかってきたイロウスが鋭い爪でなぎ払うも、その切つ先を冷静に見極めて回避、

すれ違いざまに斬撃をお見舞いする。

すると今度は二体のイロウスがみきの左右から同時に飛びかかった。

どちらも迎撃するには不可、回避も間に合わない。

初めてのピンチ——でも、みきは慌てない。

ここには大切な、信頼できる仲間がいる。

「とりやーつ！」

「やつ！」

左右のイロウスが同時にもんどり打つて倒れた。

「…………」

みきが小さく微笑む。

昂と遥香も微笑む。

それで会話は十分だった。

「あと少しつ！」

残り少なくなつたイロウスめがけ、みきは再び剣を振り抜いた。

最後のイロウスがみきの剣に貫かれた。

辺りに漂うイロウスの瘴気が少しだけ薄くなつた気がした。

「や……やつた……」

みきが肩で呼吸しながら状況を確認する。

被害ゼロ。昂も遥香もケガはしていない。

イロウスは残らず討伐完了。

シミュレーション訓練でもできたことのない百点満点だった。

「やつたあ！」

瞬間、それまで張り詰めていた緊張の糸が緩んだ。

「イロウスを倒せたよ！」

「終わってみれば楽勝だったね」

「みきも昴も格好良かつたわよ」

「そんな、遥香ちやんだつて！」

「お互いがお互いを褒めまくる。

重要な任務の第一歩をやり遂げたという安心感と、お互いが無事でよかつたという安堵感——そしてなによりも、仲間と一緒にやり遂げたという達成感が抑えきれなかった。

「この調子でどんどんやつつけちゃおう！」

「アタシたちにかかるは敵なしだね！」

「もう、昴つたら……」

和氣あいあいという雰囲気すら漂う。

三人が三人とも、星守としての自信を確かなものにしていた。

今ならどんな大量のイロウスだって倒せそう——そんな根拠のない、でも疑う余地もない確信に満ちていた。

「そういうば、なんか瘴気がちょっと弱まつたみたいだね」

一気にイロウスの群れをかたづけたためか、辺りを漂う瘴気が少しだけ晴れていた。

「でも、それだけじゃダメなんだよね？」

「ええ、このままではいずれまた、瘴気に覆われてしまうわ」

「そうさせないためにも……つと」

昴が星衣の下から取り出したのは——小さな結晶だった。

花のつぼみのような形をしていて、光を受けると鮮やかに七色に色づいた。

神樹の結晶である。

「これを埋めればいいんだよね？」

「ええ、神樹様の力でこの地をイロウスの瘴気から守ってくれるはずだわ」

「すごいなあ……神樹様つて」

みきがしみじみと呟く。

「もう、みきつたら……神樹様なんだから、すごいのは当然よ」

「でもでも！　すごいものはすごいんだよ！」

力説するみきの純心に遥香もつられてクスリと笑ってしまった。

「はいはい、よく分かりました。それじゃ、昴？」

「任せて！　これで渋谷奪還授業は成功だね！」

遥香が神樹の結晶を埋めるよう昴に促す。

昂はさつそく、アスファルトが砕けて地面があらわになつたところに――

その時――地獄の釜かまのふたが開いたように瘴氣があふれた。

「な、なに……？」

胸を締め付けるような吐はき気がみきを襲おそつた。

イロウスを退治する前と同じ――いやそれ以上に膨れ上がつた濃密な瘴氣のうみつだった。

「そんな！　なにが起こつたの!?」

「こんなの……なんかおかしいよ！」

焦りあせりが恐怖きょうぶを呼び、恐怖がさらなる不安をかき立てる。

遥香はみきの腕をぎゅっと握りしめ、昂は神樹の結晶をお守りのように抱きしめた。

『大変よつ！』

樹からの通信が飛び込んできた。

瘴氣じきが濃いためか、声も映像も途切れ途切れでしか伝わつてこない。

それでも次の一言だけは明瞭めいりょうに聞こえた。

『大型のイロウスが次々と渓谷に集まつているわ！』

最悪の現実を告げる言葉だけ残し、樹との通信は断絶した。

「八雲先生！　八雲先生っ!?」

「ダメ！　無線が通じない！」

なおも呼びかける昂を遥香が制す。

「二人とも！　急いでここを離れて……っ!!」

『ウオオオオオオシツツツ!!』

低く重い雄叫おたけびが耳をつんざいた。

よくも綿張りみなばりを荒あらしてくれたな――そう威嚇いかくして いるようだつた。

「くつ……遅かつた！」

「これが大型イロウス……！」

雄叫びは幾重いくえいにも重なつた。

前から後ろから、右から左から。逃げ場を奪うように。

「大変！　いつの間にか囮まれてる！」

「このままじゃ……」

焦る遥香と昴が逃げ道を探す。

しかし瘴気は全方位で濃密さを増すばかりだ。

逃げられると思つてゐるのか——か弱いシマウマを追い詰めるライオンのことく。それがみきには分かつてしまつた。

ゆえに気づいた時には、彼女はまた自分のやるべきことを着実に実行した。心臓の鼓動は太鼓を打ち鳴らすように激しく、でも頭は水を打つたように冷静に。

「…………二人とも、ここは私が引きつけるから」

導き出した最良の選択肢を伝える。

「二人はその隙に逃げて！」

「なにを言つてるの、みき!?」

「そんなことができるわけないじゃんっ！」

遥香も昂も声を荒らげた。

みきを囮にするような真似などできないと四つの瞳が訴える。

そんな二人とは正反対に、みきは努めて冷静に言つた。

「でも全滅するわけにはいかないでしょ？」

「バカなこと言わないので、みき！」

「怒るよ!?」

あはははと困ったように笑つたみきが、激昂する二人をなだめる。

「大丈夫、心配しないで。囮になるだけで、後でちゃんと合流するから」

みきが二人の背中にそっと腕を回した。

「私のこと、信じてほしいな？」

イロウスに襲われても彼女たちを信じて任せた自分のように。

今度は自分を信じて任せてほしいと。

二人の身体をぎゅっと抱き寄せて、みきが呟く。

「みき……」

「大丈夫だよ。絶対に戻つてくるから」

なおも食い下がる遥香をみきが優しく諭す——瞬間、

「二人とも！ 後ろ！」

昴の悲鳴が響き渡つた。

みきと遥香をめがけ、巨大なイロウスが猛烈なスピードで飛びかかつてきた。

「させないっ！」

咄嗟に遥香を突き飛ばし、みきが剣を構える。
回避不能、防御不能、迎撃不能——冷静なままの頭が非情なまでの運命を告げる。
それでも遥香と昂を助けるため、みきは退かない。

(二人が逃げ切るだけの時間を稼いでみせるつ!!)

恐怖を勇氣で抑えつけたみきに、イロウスの凶爪が振り下ろされて――

イロウスが真っ二つに裂けた。

「えつ……？」

重苦の断末魔の叫びを残しながらイロウスの巨体が沈む。

茫然とするみきの向こう——斬り裂かれたイロウスの隙間から見えたのは——
「まったく……仲間割れをしている場合か?」

星衣に身を包み、やれやれと剣を構え直した明日葉だった。

「あ……明日葉先輩!?

「はい、れんげもいるわよー」

「ホント、仕方ないわね……」

自分たちも忘れないでと言うように、星衣姿の蓮華とあんこが姿を現した。

「助けに来てくれたんですか！」

「ありがとうございます、明日葉先輩！」

遥香と昂がホツとした様子で声を弾ませる。

これで大丈夫だ——みきたちが安堵の表情を浮かべる。

だが、明日葉はそんな三人をたしなめるようにキッと眉を吊り上げた。

「こら、気を抜くんじやない！」

『はっ、はい!』

思わずお叱りにみきたちが反射的に直立不動になつた。

「おまえたちの渋谷奪還授業はまだ続いているぞ」

「えつ……一緒に戦つてくれるんじや……」

「なーに甘えたこと言つてんの」

あんこがじと一つと三人を見据える。

「れんげたちはー、パニックになつてるみんなをフォローしに来ただけよー?」

蓮華はにこやかに微笑んだまま、やはり手を貸そとはしない。

「忘れるな、これはおまえたちの作戦だ。途中で放り投げてどうする」

明日葉がやれやれと肩をくめた。

ここに来たのは三人を助けるためというよりも、三人に活を入れるためだった。

「ちょっと予定外のことが起こったくらいで弱音をはいてるようじや、まだまだ修行が足りないな」

明日葉の叱責は続く。

これをしゅんとした表情でみきたち三人が猛省する。

もちろんそんな間にもイロウスたちは容赦なく牙をむいてくるのだが、これには蓮華とあんこが応戦していた。

しかし明日葉のお説教は意外に長く――

「ちょ、ちょっと明日葉！　そのくらいにしなさいよっ！」

「このままじゃイロウス全部、れんげたちで倒しちゃうわ！」

本末転倒になつてしまふとあんこと蓮華からクレームが入る。

「む……いやしかし、ここはしっかりと星守としての自覚を……」

「じゃ、ここから先は一年生組にやつてもらうわよ」

「明日葉のお説教タイム、おしまいね♡」

あんこと蓮華が戦闘態勢を解いた。

半数以上の仲間が次々と倒され、残ったイロウスたちは怖気づいたのか脚が止まつていった。

「みきも、昂も遙香も、慌てるな」

明日葉はさつきまでとは違つて、優しい声で語りかける。

「落ち着いて戦えは勝てる実力は十分にあるんだ」

「そうよ、目の前の敵にちやんと集中しないと」

「あんたたちの力はこんなものじゃないでしょ？」

蓮華とあんこも、みきたちの背中を押すように応援した。

「…………はいっ！」

頼れる先輩たちの言葉に、みきはさつきまでの投げやりな自分を捨てた。

（自分が犠牲になればいいなんて自分勝手だ……そんなことしても、昂ちゃんも遙香ちゃんも喜んでくれないのに……）

一人を捨てて二人を救う――そんなのは考えちゃダメなんだ。

絶対に三人で無事に戻る、そう信じなくちやダメなんだ。

「二人ともごめんね、私ひとりで焦っちゃつて……」

みきが申し訳なさそうに目を伏せる。

そんな彼女をいたわるよう、昂と遥香がみきの手を握った。

「うん、こつちこそごめん」

「アタシもなにもできなくて……」

「お互たがいが自分に足りなかつたものを謝る。」

三人で協力しなくちやいけないと心を一つにする。

その光景に明日葉たちは満足そうに目を細めた。

「その悔やしさを忘れるな。それはいつかきっと大きな力になる」

「ほら、早く終わらせたさと帰るわよ」

「三人は前にだけ集中して。ちやんとれんげたちが後ろは守つてあげるから」

「今はただ、目の前の敵に立ち向かえ！」

最後の明日葉の言葉がきつかけとなつた。

ぐつと表情にたくましさを取り戻したみきは、肩を並べる昂と遥香に頷いた。

「行こう、昂ちゃん、遥香ちゃん！」

再び剣を振り上げ、待ち構えるイロウスへと駆け出す。

「私たち、星守の力……見せてあげる！」

◆ ◆ ◆

刃やいばが一閃いつせんする。

一瞬いっしゆんの硬直こうちょくの後、重力に負けたようにイロウスの巨軀きょくが沈んだ。

「やつたああああ！」

最後のイロウスを仕留めたみきが歓喜かんぎのあまり飛び跳ねる。

「渋谷奪還授業、今度こそ成功だね！」

「こうやつてひとつひとつ取り戻していけば……また地球で暮らせる日がきっと来るわよね！」

昂と遥香も興奮を抑えきれない。

一度は諦めかけた勝利だけに、こうして達成した後の充実感もまた一味違っていた。

「あれっ？ 明日葉先輩たちは？」

ようやく落ち着いてきたところで、見守つてくれていたはずの先輩二人がいないことに気づく。

「神樹の結晶を埋めて、先にコロニーに帰つたみたいだね」

「それじゃあ、私たちも戻りましょうか」

昴と遥香が踵を返した——が、みきの足取りだけが重い。

「……はあ」

「どうしたの、みき？　ため息なんかついて」

「いや、私たちつてまだまだだな、って思つて……」

結果だけ見れば渋谷奪還授業は成功した。

しかし明日葉や蓮華、あんこが来てくれなければどうなつていただろう——と回顧する。

「結局、今回も明日葉先輩たちに助けてもらつたし……」

思うところは昴も遥香も同じなのか、みきの言葉に二人ともすぐに返事ができなかつた。

「…………って、いけないいけない！」

三人そろつて落ち込むなんて、また明日葉先輩に怒られちゃう——みきは自分のほっぺたをパンとたたき、スパッと頭を切り替えた。

「今日はあんなどつたけど、次こそは私たちで成功させようね！」

「うん…………そうだね！」

「私も頑張るわ！」

苦い記憶は次への希望で塗りつぶせばいい——三人はお互いの顔を見つめながらクシリと微笑んだ。

「あ、そろそろ転送が始まるみたい」

遥香の周囲を淡い光が取り囲み始めた。

続いて昴、みきも同じように光に包まれ、輝きが次第に増していく。

やがて遥香が、そして昴とみきが光に呑み込まれた。

その刹那、最後に光の中へ消えようとしていたみきを見つめる瞳があつた。

氷のように冷たい二つの——いや、四つの瞳だつた。

◆ ◆ ◆

砕けたガラス、倒れたコンテナ、錆に覆われた配管、散らばった瓦礫——捨てられてか

らの年月を否応なく感じさせる廃工場があつた。

広大な敷地に乱立するプランツは朽ち果て、建屋には縦横にひびが走つている。

風が吹けばすべて砂塵となつて消え飛んでしまうのではないか。

そんな危険で廃れた地を、一人と一匹が歩いていた。

周囲の荒廃など気にする様子もなく、小さな、だがしつかりとした足取りで進む。やがて一人と一匹が一つの建屋へと入っていく。

暗闇に覆われている通路を進み、奥へ奥へ——明かりが灯つた一室へとたどり着いた。

「あら、戻ったの？」

書類や実験器具が乱雑に散らかった研究室に一人の女性がいた。

イスに深々と座つて物憂げな表情で天井を見つめたまま、視線だけを入り口へと傾げる。

「…………お友達……いじめられた」

悔しげに呟く。

胸の奥から突き上げる怒りを抑えつけ、涙となつて瞳から滴り落ちた。

その涙を額に受けた一匹が——小さなロウスがぶるりと身を震わせた。

「…………そう」

その様子を眺めていた女性は、しばしの沈黙の後、立ち上がりて少女へと歩み寄つた。その身体をそつと抱き寄せ、背中をさする。

「きっと悪い人たちなのね。サドネのお友達を傷つける悪い人……」

少女の耳元に顔を寄せた女性は、ねつとりと、しみこませるように囁いた。

「悪い人……。エヴィーナと同じ格好なのに……？」

少女の問いに女性——エヴィーナがゆっくりと頷く。

「なんだ……。悪い人なんだ。お友達を……サドネのお友達をいじめる悪い人……」

少女の瞳の奥には暗い闇が宿つた。